

アセアン・レポート

2023年2月号

《今月号のメニュー》

◆ 今月のシンガポルトピックス

「シンガポールの民族融和政策について」

◆ 今月のバンコクトピックス

「ベトナムの鉄道普及と日系企業の関わりについて」

千葉銀行

シンガポール駐在員事務所

バンコク駐在員事務所

今月のシンガポールトピックス

「シンガポールの民族融和政策について」

2月3日から4日にかけてシンガポールの中心部で「チンゲイパレード」が3年ぶりに開催されました。このイベントは旧正月の時期にシンガポールの中華系住民、マレー系住民、インド系住民がそれぞれの民族・宗教の衣装を纏ってストリートパフォーマンスを行うイベントで、同様のイベントとしてはアジア最大規模と言われています。シンガポール在住の日本人有志の団体も派手な衣装に身を包んでパレードに華を添えています。

かつての旧正月は邪気を払う目的で爆竹を鳴らす習慣がありましたが、1972年以降は爆竹が禁止され、その代替わりとして「チンゲイパレード」が開催されるようになりました。「チンゲイ」とは「衣装と仮装の芸術」という福建語に由来しており、大きな音と光を伴う派手なパレードや花火で会場が彩られます。イベントが佳境を迎える中、終盤では「We Love Singapore」や「We are the One」といった曲が合唱され、民族融和を強調する場面が見られました。このように様々な民族を抱えるシンガポールでは、異なる民族が共同で参加する行事が定期的に行われています。今回のシンガポールトピックスではシンガポールの民族融和政策についてお伝えします。



(3年ぶりの「チンゲイパレード」の様子。筆者撮影)



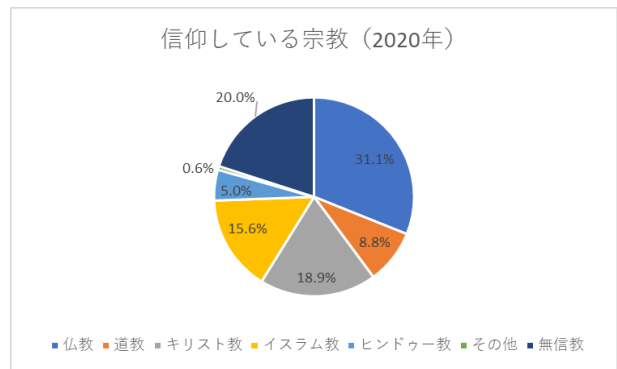
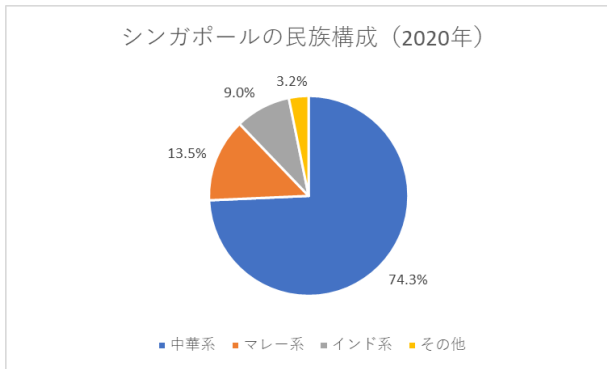
(現地報道より引用)

1. シンガポールの民族構成

シンガポールでは、東京 23 区より少し大きい国土（約 720 km²）の中に様々な民族が異なる宗教観を持って生活しています。まずは、シンガポールが多民族国家となった歴史的な背景を振り返ってみます。

シンガポールを含むマレー半島は、19 世紀後半からイギリスの植民地でした。イギリス統治下のマレー半島ではゴムのプランテーション開発や錫の産出が盛んに行われており、労働力として中国やインドからの移民が受け入れていました。1963 年にマレーシアに併合された後、同国の一つの州になったシンガポールにはマレー人も移り住むようになりました。

1965 年にマレーシアから分離独立し、多民族国家としてのシンガポールが誕生しました。2020 年時点でのシンガポールの民族の構成は中華系民族が全体の 74.3% を占め、マレー系が 13.5%、インド系が 9.0% となっています。



（出所：シンガポール統計局のデータをもとに筆者作成）

シンガポール建国前のイギリス統治時代には、民族間の対立に起因する衝突から死者が出ることもありました。こうした状況を受け、当時のイギリス政府は同一民族毎に居住区を割り当て、他の民族と距離を置くことで衝突を回避する方針を採りました。その名残りとして、今でも「チャイナタウン」（中華系）や「リトルインディア」（インド系）、「アラブストリート（マレー系民族やイスラム教徒が多く居住する地区）」、という地区が国内に点在しています。

しかし、1965年の建国以降、シンガポール政府は異なる民族を分け隔てるのではなく、むしろ融合させることを目指しています。そのような政府の取組みのうち、言語教育と祝日、生活コミュニティについて紹介していきます。



（左からリトルインディア、アラブストリート。現在は観光地として多くの人で賑わっている。筆者撮影）

2. 言語教育について

シンガポールの公用語は英語、中国語、マレー語、タミル語の4つですが、学校では原則英語で授業が行われ、その他の言語は第二言語に位置付けられています。例えば、学校の授業が多数派民族の言語である中国語で行われてしまうと、少数派民族との不公平が生じてしまいます。国際社会を意識し、英語教育を主とすることは

もちろん大事ですが、政府の方針として言語教育が各民族にとって不公平とならないように配慮されています。

3. 祝日について

また、国民の祝日についても各民族や宗教に配慮されています。下表では 2023 年のシンガポールの祝日のうち、宗教行事等に係るものを抜粋しておりますが、各宗教にとっての重要な日が祝日とされています。そのほか、祝日ではありませんが、毎年 7 月 21 日は「Racial Harmony Day（民族融和の日）」とされ、多民族が共生することの大切さについて考える時間を持ち、民族や宗教に対する見方を普段の生活や学校教育の中に意識的に取り入れています。

シンガポール2023年祝日（一部抜粋）

日付	祝日名	内容
1月22～23日	チャイニーズニューイヤー	中国の旧正月
4月7日	グッドフライデー	キリスト教の祝日
4月22日	ハリラヤプアサ	イスラム教の祝日
6月2日	ベサクデー	仏教の祝日
11月12日	ディパバリ	ヒンドゥー教の祝日
12月25日	クリスマス	キリスト教の祝日

（筆者作成）

4. 生活コミュニティについて

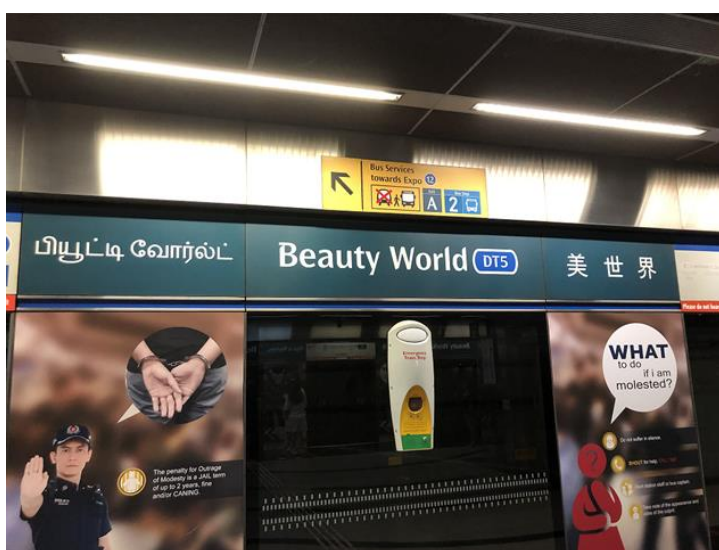
次に生活コミュニティに関する政府の取組みについて紹介します。シンガポール国民の約 8 割は「HDB（Housing Development Board）」という公共住宅に住んでいます。これは行政機関が提供する集合団地で、日本の公団住宅に近いものといえます。居住するためには所定の要件を満たし、行政機関の承認を得る必要がありますが、その審査過程において各団地の入居者の民族構成が、国民全体の民族構成と同じ割合となるように管理されています。これは特定の民族が集結して排他的なコミュニティが形成されてしまうことを回避する目的があります。

そして、民族融和を促す組織として大切な役割を果たしているのが「人民協会（People's Association）」です。人民協会が運営するコミュニティセンターはシンガポール国内に 108 か所点在し、日本の公民館のような役割を担っています。バドミントンやサッカーなどのアクティビティ、絵画教室、音楽教室、語学教室、民族料理教室など幅広いテーマから地域住民にとって魅力のあるイベントを提供しています。各種イベントの中で最大規模といえるのが冒頭紹介した「チンゲイパレード」です。このように多民族を融和させるべく、政府主導の活動が日々行われています。

5.おわりに

多民族国家のシンガポールでは、交通標識や看板表示に複数の言語が併記されているのはもちろんですが、コロナ禍で首相が国民に演説する際にもシンガポールならではの光景が垣間見られました。首相ははじめに英語、続いてマレー語と中国語で同じ内容で演説しました。全ての国民に政府の方針を自分の言葉で伝える姿は強く印象に残りました。

国民の中には政策や現状に不満を抱えている人もいますが、他国と比較してシンガポールは多民族との融合に成功していると言われていています。民族融和政策がシンガポールの国力を支える根幹になっていると言っても過言ではなく、多民族が共生する国家にとって、一つの好事例になるかもしれません。



(地下鉄の駅名表記、左からタミル語、英語（マレー語）、中国語。筆者撮影)

千葉銀行シンガポール駐在員事務所は、今後も、シンガポールを初めとした ASEAN 地域の様々な情報をご提供してまいります。お気軽にご相談ください。

今月のバンコクトピックス

「ベトナムの鉄道普及と日系企業の関わりについて」

ベトナムは、北部の首都ハノイ市、南部の商都ホーチミン市など都市部を中心に人口が集中し、急速な経済発展の傍らで『慢性的な渋滞』に悩まされています。道路を埋め尽くす程のバイクの数に、誰もが驚かされることでしょう。

日本では都市部から地方に至るまで、当たり前のように張り巡らされている鉄道網が、ベトナムにはありません。シンガポールやタイなど都市開発を計画的に進めてきた周辺国と比較してベトナムの既存の鉄道網は脆弱ですが、現在新たな鉄道網としてホーチミン市「都市鉄道」の建設プロジェクトが進められています。

今回は、ようやく開業の兆しが見えたホーチミン市の『都市鉄道 1 号線』を中心に、鉄道の普及による渋滞緩和、経済発展を目指しているベトナムと、日系企業の深い関わりをレポートいたします。



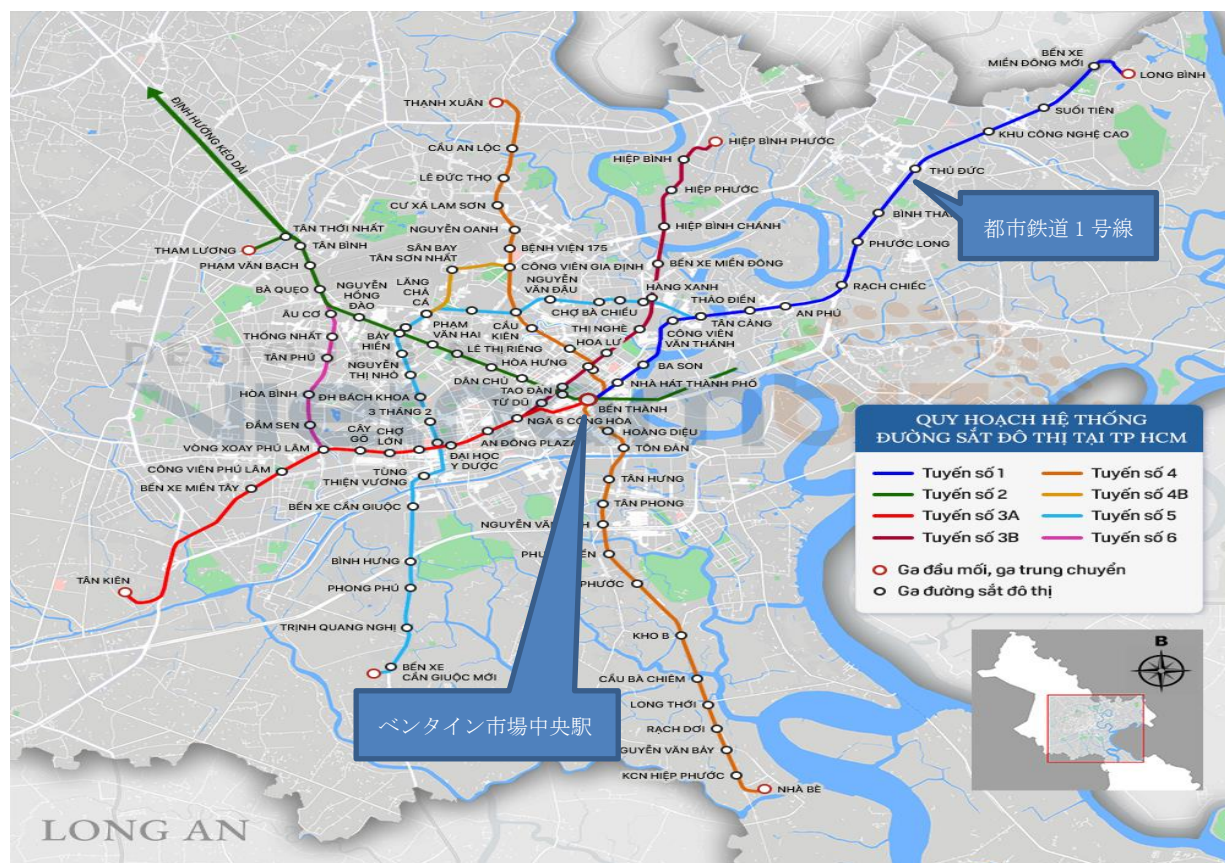
※街中の渋滞の様子

出所：筆者撮影

1. ベトナムの鉄道状況

ベトナムの鉄道網は全土で 2,631 km とそれほど長くはなく、ベトナム南北に伸びる南北縦貫線、ベトナム北部を東西に延びる旧滇越（てんえつ）鉄道、およびその支線から成っています。

特に南部の大都市であるホーチミン市では住民の主な移動手段がバイクであり、鉄道網整備の遅れ等を背景に、慢性的な渋滞や大気汚染が社会問題化しています。こうしたなか、2007年、ホーチミン市人民委員会は都市鉄道プロジェクトの実施機関として、都市鉄道管理局を設立しました。同局では、ホーチミン市の観光地であるベンタイン市場前を中央駅として起点とする、全8路線の建設を計画し、着工を開始しました。その路線予定図は下図の通りです。



※ホーチミンメトロ全体図

出所：Vietnam Biz

2. ホーチミン市『都市鉄道1号線』計画について

都市鉄道1号線は、日本のODA事業として、清水建設(株)・前田建設工業(株)のJVが受注しました。国際協力機構(JICA)が実施する日本の円借款事業で建設資金が賄われており、2012年に着工しました。

同路線はホーチミン市1区ベンタイン市場から、トゥードック市スオイティエン公園までを結ぶ路線で、ホーチミンメトロ全体図(上図)では、中央から東に延びる青い区間にあたります(全長19.7km)。コロナ禍や資金面の問題などから当初計画よりも完工が大幅に遅延していましたが、既に線路の工事は完了しており、運転指令室などの工事を残すのみとなりました。ホーチミン市は、日本とベトナムの外交関係樹立50周年にあたる2023年中の完工を目指しています。

なお、車両は㈱日立製作所が製造しており、2022年5月に全51車両が既にホーチミン市に到着しています。



※ベンタイン市場中央駅予定地（写真右がベンタイン市場、写真中央が駅地上部分、写真左が商業施設建設地）
出所：筆者撮影

3. モビリティ・マネジメントと駅ナカ事業

今回の都市鉄道プロジェクトでは、東京メトロを中心とした協力のもと、鉄道利用を促進する『モビリティ・マネジメント』活動や、『駅ナカ事業』の取組みといった、非鉄道事業の整備も併せて行われていることも注目材料の一つです。

『モビリティ・マネジメント』とは、交通渋滞や環境課題、あるいは個人の健康問題に配慮して、過度に自動車・バイクに頼る状態から、公共交通や自転車などを上手く利用する方向へと自発的な転換を促す取組みのことを指します。例えば、千葉市では、千葉市内に転入した方などを対象に、市内の鉄道やバス路線に関する情報をまとめたリーフレットを配布する等、公共交通利用促進に向けて積極的に情報発信しています。

途上国の都市交通開発では、この『モビリティ・マネジメント』に類する取組みはほとんど事例がなく、都市整備とセットで取り組んでいる本件のような協力体制は、日本独自のスタイルといえます。

また、『駅ナカ事業』については、コンビニ、飲食店などの商業施設はもちろん、行政機関や保育園など、地域社会向けの公共サービスが提供されるなど、日本独自の

発展を遂げてきた分野と言えます。このようなノウハウをベトナムに提供することにより、駅を単なる交通機関として捉えるのではなく、市民生活に密着した場所として活用することが期待されています。



※千葉市公共交通利用促進リーフレット

出所：千葉市ホームページ

4. おわりに

ホーチミン市都市鉄道 1 号線が開業し、市民生活に浸透していくことで、その他計画されている 7 路線の建設期待が高まるとみられています。渋滞緩和や大気汚染問題の軽減のみならず、モビリティ・マネジメントや駅ナカ事業といった鉄道に付随する事業の発展も期待されています。上述の通り、既に日本の様々な企業が関与しておりますが、日本国内で鉄道・駅周辺ビジネスに関わる企業にとっても、ベトナムを新規投資先として検討するきっかけとなるのではないのでしょうか。

鉄道・駅の発展を期に、更なる成長が期待されるベトナムに注目です。

千葉銀行シンガポール駐在員事務所及びバンコク駐在員事務所では、アセアン地域への進出等を全面的にサポートしております。

現地法人設立の手続きやオフィス・工場物件のご紹介、税制等の情報、販路・調達先のご紹介など、幅広いサービスを提供させて頂いておりますので、弊行お取引店を通じ、お気軽にご相談ください。

以 上

※ここに掲載されているデータや資料は、情報提供のみを目的としたもので、投資勧誘等を目的としたものではありません。投資等の最終決定は、ご自身の判断でなされるようお願いいたします。

※また、弊行は、かかる情報の正確性や妥当性については、責任を負うものではありません。

本レポートに関するお問い合わせは、千葉銀行 市場営業部 海外支店統括グループ

(Tel : 03-3270-8526、e-mail : kaigai_tokatsu@chibabank.co.jp) までお願いいたします。

《出典》

NNA、時事通信、各種新聞報道